大会報告

世代交流の号砲

木村佳司

全日本リレーオリエンテーリング大会 2011　2011 年 11 月 5 日　長野県松本市

（全写真：上林弘敏）

北アルプスを背景に号砲が響いた。日本のオリエンテーリングの記憶に新たな１ページを加える合図となった。

2011 年 11 月 5 日（土）長野県松本市
全日本リレーオリエンテーリング大会

団体総合で初優勝を掴んだ愛知県

団体総合結果

1	愛知	30 点
2	東京	29 点
3	埼玉	25 点
4	神奈川	24 点
5	千葉	22 点
6	京都	17 点

男子選手権 ME

1	静岡 1	1:43:52
2	千葉 1	1:45:54
3	愛知 1	1:46:48
4	埼玉 1	1:49:33
5	東京 1	1:50:38
6	新潟 1	1:56:05

女子選手権 WE

1	埼玉 1	1:41:00
2	東京 1	1:42:57
3	神奈川 1	1:48:03
4	愛知 1	1:49:00
5	千葉 1	1:50:05
6	三重+滋賀	1:56:19

男子ジュニア MJ

1	京都 1	1:41:21
2	東京 1	1:45:39
3	愛知 2	1:49:08

女子ジュニア WJ

1	愛知 1	1:17:44
2	埼玉 1	1:25:53
3	新潟 1	1:31:54

男子シニア MS

1	東京 1	1:40:12
2	神奈川 1	1:41:29
3	静岡 1	1:42:11

女子シニア WS

1	神奈川 1	1:35:53
2	東京 1	1:46:13
3	長野 1	1:55:01

男子ベテラン MV

1	千葉 1	1:39:08
2	愛知 1	1:42:00
3	神奈川 1	1:43:51

女子ベテラン WV

1	埼玉 1	1:30:00
2	愛知 1	1:49:06
3	兵庫+岡山	1:49:40

スーパーベテラン XV

1	愛知 1	1:51:34
2	神奈川 2	1:57:11
3	京都 1	1:57:26

男子選手権で優勝を掴んだ静岡県の継走

愛知県！　総合初優勝

20 回目にして愛知県が総合初優勝を勝ち取った。

今までの19回にわたる全日本リレー大会において総合優勝を獲得した都道府県は東京、埼玉、神奈川のわずか 3 都県。この 3 都県で優勝杯を持ちまわっていた。20 回目にして初めて愛知県がそのカベを破り優勝杯への扉をこじ開けたのだ。今までは総合優勝に関しては「南関東リレー大会」だったが、ここで初めて「全日本リレー大会」に相応しい歴史が生まれたと言えるだろう。

愛知の強さは全世代のクラスにチームを送りこみ、すべてのクラスで得点していることだ。まさに愛知の全世代挙げて掴んだ堂々たる総合優勝だ。

全日本リレー史上最大

今回の全日本リレーには一般クラスを含めて 270 チームの参加があった。単純に選手だけで 810 名が出走したことになる。これは全日本リレー大会史上最大の参加者数である。

都道府県選手団としての数ももちろん過去最高。翌日に同じ松本市で開催される学生選手権大会を控え、多くの学生競技者が松本入りした。その学生たちが各都道府県のジュニアチームや選手権チームに入って入ることも今回の特徴だ。

今までは2002年に同じ長野県の菅平高原で開催された全日本リレーの 800 名が最大であった。ただこの時の参加者の多くは一般クラスだった。翌日に開催されるインカレショート大会を控えて学生参加者が一般クラスを賑わせていたのだった。

名実 ともなった団体総合表彰

今回の全日本リレー大会はどの年代別クラスにも多くのチームが参加している。今回愛知県が総合優勝を勝ち取った背景には各年代別選手権の参加チームが増えたことも影響している。

年代別選手権には上位 6 チームまでに得点が与えられるが、参加チームが 6 チームに満たなかったクラスは得点が減じられるルールとなっている。だがこの特殊ルールが適用されたクラスは女子ベテランクラスだけにとどまった。その年代別選手権クラスも上位を目指す都道府県チームがひしめいている。

このように競い合う環境で切磋琢磨し得点を積み上げた都道府県が団体総合の栄誉を勝ち取る。これこそが名実ともなった団体総合戦と言えるだろう。

埼玉県女子ジュニアの継走。
レースはスピーディに展開した。

コンセプトは世代交流

今回の全日本リレー大会は土曜日の開催となった。翌日に同じ会場でインカレ（学生選手権大会）を行うように日程を組んだためである。この 2 つのイベントをまとめて「オリエンテーリングサミット 2001」と称し、同じ実行委員会で運営した。

実行委員長である私がこのイベントに託したコンセプトは「世代交流」である。

インカレ（学生選手権大会）は多くの学生が目指す大会である。全日本リレーは多くの社会人や地域が目指す大会である。このインカレと全日本リレー大会を連続日程で行うことで、全日本リレーとインカレに参加する世代が交流することを目指した。

会場や選手の取り組みを見ると、今回のイベントをきっかけにそれぞれの都道府県や学生の交流が少なからず生まれたようだ。学生を都道府県選手団に迎え、大選手団を送りこんできた都道府県もあった。正に私の願ったコンセプトが実現した瞬間である。

開催県となった長野県も多くのふるさと選手を迎えてチームを組むことができた。さらに久しぶりに顔を見せるメンバーも長野チームで全国の選手と競い合った。地元開催となればどうしても愛好家の多くが運営に回らざるを得ない現状の中で、それを上回る新人選手の獲得に成功した。こちらも大成功だった。

テレインは「アルプス公園」だが、丘陵の森がほぼそのまま残っている。紅葉に染まりゆく森を駆け抜けた。

次の一手が明暗を分ける

今回の全日本リレー大会が各都道府県の記憶に残る新たな 1 ページになるのか、そうでもないのか。それはこの大会のあとの各都道府県メンバーの動きにかかっている。

今回交流に成功した新人を自分たちのメンバーとして永く受け入れるような活動をするのか、それともこれで終わるのか。世代交流の次は世代交代を進めなければその都道府県のオリエンテーリングには未来が無いはずだ。

東日本大震災の被災 4 県代表が全国からの支援に感謝のスピーチ。閉会式にて。宮城県は被災地にも関わらず大選手団を送りこんできた。

（木村佳司）

男子選手権第 1 走者。スタートを待つ静寂の一瞬。背後からは北アルプスの峰々が選手を見守っている。